
鏡の奥の、そのまた奥は.....

雨宮竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の奥の、そのまた奥は……

【Nコード】

N3426D

【作者名】

雨宮竜

【あらすじ】

「我、この世界を支配するもの！」鏡に手を当て、そう叫ぶと幻の国に行くことが出来る。その幻の国で手に入れられるのは、すべてを消し去る力と、あるものを生み出す力。君はどう使う？

物語の始まり

悪魔か、天使か、人間か。それとも、幽霊？

ここは次元が重なることで出来る幻の国。

ここに来たものには、すべてを消し去り、あるものを生み出す力が与えられる。

鏡に手を当て、叫んでみて。

「我、世界を支配するもの！」

今から君を、違う世界へご案内します。

物語の始まり（後書き）

良かったら『この町で君に出会い』も読んでみてください

きっかけ

俺は、なんてことをしてしまったんだろう。人殺しとか、そういうグロイことをしたんじゃない。だけど、本当にやばいことをしてしまった。

「ここから出せよ!!」

鏡を叩く。映っているのは俺だけで、誰に向かって叫んでいるのだろう。鏡にひびが入る。もう一度叩くと、鏡は粉々になって砕け散った。

俺は、井上恭いのうえきょうつ。十四歳の中二。井上っていう苗字は、本当の苗字ではなくて、本当の苗字は柏木かしわぎ。小さい頃に捨て子となり、養子として井上家にいる。

その井上家で俺は、召使いのような扱いを受けていた。こんなことになったのも、そのせいだ。

今日は、一段とおじさんの気が荒かった。俺が喋ろうとしただけで睨んできたり、殴りかかろうとする。少しぐらいの抵抗はするが、あんまり抵抗をすると、今度はおじさんがナイフを持って睨んでくるから危険でしょうがなかったんだ。

怖くて、奥の方で生活していたら俺はあの鏡に出会ったんだ。見た目は鏡とは言えない位、黒ずんでいた。手で、それを払ってみたら、怖くなった。なぜなら、鏡の奥に黒い渦巻いているものがあったからだ。

「なんだよ……これ」

手が震えた。こんなおかしな鏡、見たことがない。

「何やってるんだよ。そんなところで」

兄の声だ。正しくは義理の兄だけど。兄は、俺の元まで寄ってきて眉間にしわを寄せた。「お前、これどこで見つけたんだよ」

「……ここで、です」

敬語を使った。

「ここで？」

「はい」

兄はにやりと笑みを浮かべた。不審な笑みだ。「お前さあ……」

鏡の渦が、大きくなっていた。手の震えが、止まらない

「その鏡に手を当てて、叫んでみて。『我、この世界を支配するもの！』って」

「兄さんがしてください」

「いいから、言えよ。お前、俺に従えねえのか？」

兄の顔は、怖い。目だって、テレビに映ってた犯罪者のような目だ。

「早くしろよ」

脅迫。殺されるという、感覚が全身に伝わる。

やらないといけない。やらないと、俺が殺される。やらないと、俺は二度と外に出られない。手を鏡に当てた。息を吸う。

「わ……わ、我、この世界を支配するもの……！」

言った。兄は、笑っていた。

「よく言っただな……召使い。今日から、お前は自由だぜ。良かったな、そうなれて。念願だっただろ？　じゃあな」

なんで、それだけで自由になれるのだろう。この家から出られるのは念願だけど、意味が分からない。

兄は、何が言いたいんだ？

「兄さん、それはどういう……」

鼓動が鳴り響く。鏡に当てていた手はずそうとした、が、外れない。

「なんでとれないんだよ？　なんで」

叫んだ。兄は高らかに笑い、俺の体に手を当てた。

「助けてくれるんですね……」

そう思った。そのときだった。

兄の手は、俺の体を押した。重心が傾く。俺は、手に力をこめて

重心を元に戻そうとした。が、手がない。いや、手が鏡の中に溶けている。

「サヨウナラ。召使い」

兄は棒読みでそう言った。顔が青ざめる。「助けてください!」
体も、手と同じように鏡の中に溶けていく。慌てて、もがこうとした。そうすると、余計に体が鏡の中に溶けていってしまう。俺は、死を悟った。

そして、気がついたら俺はこの世界にいた。簡単に考えたら、鏡の中の世界だろう。この世界は、真っ暗だ。夜よりも、暗い。暗黒の世界だった。

俺は、この世界でこれからどうなるのだろう……。

闇の中

俺はまず、この世界を探検することにした。どうせ、もとの世界に戻ったってあんな家じゃ、怖くて自分の好きなことも出来ないんだから、ここのほうがましなのかもしれない。鏡だって、砕け散ったんだ。もう、帰れないのかもな。

暗闇は、永遠に続くのだろうか。足が、あるのかどうかも分からない。自分自身が見えない。

「なら、なんで俺はここにいてるって分かるんだ？」

目があるから。だと分かっているって信じられない。光が入らない世界は、自分も見えない世界なんだと思い知らされる。

「あのやろっ……」

笑ってる兄の姿を思い浮かべる。怒りに満ちた感情が、沸いてくる。眉間にしわを寄せて、歩く。

「どこでもいいから、俺がいるって認識出来るところに着いてくれよ！ 灯りがついてる街に誰か連れてってくれよ！」

叫んだ。

何も、起こらないんだ……。希望が、一つ砕け散るような気がした。「お願いだから……」言葉も、何もかも、闇に溶けていくような気がした。

その時だった。俺の目線の先に、灯りが見えたのだ。目を疑った。ぼんやりとしか、見えない。ただ、その灯りは今にも消えそうだ。早く、あのところまで行こう。走るんだ。

無感覚だった。足を踏み出した。闇は、雲のようになってこの世界を包んでいる。風が吹いた。旋風つむじかぜのようだ。灯りが、見えにくくなっていく。

「幻……か？」

そう、確信しようとした。でも「幻だから歩かない」じゃ、いけない。「幻だとしても、歩くんだ」そう思わなければならぬんだ。

自分に言い聞かせた。

闇の中（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

これからも、『鏡の奥の、そのまた奥は……』をよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3426d/>

鏡の奥の、そのまた奥は.....

2011年10月4日15時44分発行